高橋和巳の青春とその時代

小松左京 編

構想社

新時代の青年たち
謳歌した青年たちだけが戦後いたのではない　実は、悲劇なる党派と称さるべき「群の青年たちもいた……青年はいつの時代にも時代の矛盾にもっともはげしく引き裂かれることによって、もっとも本質的なものを生涯をかけて「つかむ存在」であり、高橋和巳は、その「つかむ」片の真実のあったことを証明」した彼は元来人の悲しみには弱い性質だった"泣きの高橋"は痩せて背の高い一個の"悲の器"であった　鋭い知性、抜群の読解力、そして緻密で壮大な理論構成力　薄明の中でのみ鋭く輝き、玲瓏人をひきつけるタイプ、それだけに繊細で傷つきやすい彼は、徹底的な「内部の人」であり「内面型人間」であった　文学にとって人生は必要か？　なぜ彼は、人生を斬りすて、文学に賭けてしまわなかったのか

オートバイで駆けぬけてゆく颯爽たる「太陽の季節」を

高橋和巳の青春とその時代

小松左京 編

構想社

高橋和巳の青春とその時代

一九七九年一月二〇日第三刷発行

定価一二〇〇円

著者代表　小松左京

発行者　坂本一亀

発行所　株式会社　構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ六
〒一〇一　電話（〇三）二五四一六六七七
振替口座（東京）一一五五九七一

印刷所　新陽印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替えいたします）

© S. Komatsu 1978

0095-00020-2463

小松左京編・高橋和巳の青春とその時代・目次

長篇小説の鬼——小説・高橋和巳　北川荘平　6
その若き日　三浦浩　58
等持院の家　宮川裕行　64
「対話」と『捨子物語』のころ　石倉明　79
生駒の思い出　橋正典　89
高橋和巳さんの思い出　大林律子　99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心の中の一つの肖像　福田紀一　118
雑感　荒井健　123
「内部の友」とその死　小松左京　129
座談会　高橋和巳の青春とその時代　「対話」創刊同人　187
あとがき（小松左京）　222
初出一覧　226

装幀　杉浦康平

高橋和巳の青春とその時代

長篇小説の鬼　小説・高橋和巳

北川荘平

1

布施市（現・東大阪市）は、大阪の衛星都市の一つである。中小工場と住宅地が無秩序にいりまじった、どことなくほこりっぽい灰色の街であった。

昭和三十年六月のなかごろ、当時、その街の市立日新高校定時制で夜間の時間講師をしていた高橋和巳は、勤めの帰りに、近鉄大阪線長瀬駅前の小さな書店の店頭で、発売されたばかりの「文學界」七月号を手にとった。うっとうしい梅雨空で、むし暑い夜だった。いつもは午後十時に終る授業が、この夜は何かの都合で、少し早目にすんだので、ふと立ち寄った書店の雑誌置場にそれがでていたのである。

（……そうだ、この号だな）

高橋和巳は、ふるえる手で目次をめくってみた。いきなり目に飛びこんできたのは「文學界新人賞発表」という黒地に白抜きの鮮明な活字であり、そしてその左にさらに大きな活字で印刷された当選作名『太陽の季節』と石原慎太郎という始めて目にする作者名とであった。高橋和巳という字

は、そこにはなかった。

（やっぱり、奇蹟は起らなんだ……）

半年前に、この新人賞に応募して、高橋和巳も、決して得意でない短篇を一つ書いて送っていた。冷静に考えてみれば、当選していれば当然事前に何らかの連絡がある筈であり、発表誌をあけてみたとたんに、そこに自分の名前を発見するなどということはあり得る筈がなかったが、その時はなぜか、そういう奇蹟がおこりそうな気がしたのである。

高橋和巳は、にぶい落胆と失望を感じながら、選考経過発表のページを繰った。そして、そこで完全にうちのめされた。当選者・石原慎太郎の若々しい笑顔の写真と、大胆不敵な受賞の感想とならんで、最終審査に残った四篇の作品と作者名が印刷されていたが、そこにも高橋の名前はなく、さらにその下にならんだ十数篇の第一次予選通過作の小活字の群の中にも彼の名前は見えなかった。釜ヶ崎の貧民街を舞台にした五十枚あまりの憂鬱な物語は、当選はもちろん、第一次銓衡にさえ入らなかったのである。この事実は、その頃から自らの天職は小説家以外にはない、との自覚を固め、生涯かける気魄で、本格的に文学に取り組みはじめようとしていた高橋和巳にとって、痛烈な一撃だった。そして、当選したのが自分の文学とは全く対蹠的な石原慎太郎であったという事実とが、二重のショックとなって、高橋和巳を痛打したのである。

ちなみに、この時、最終審査にのこったのは当選作・石原慎太郎の『太陽の季節』、有吉佐和子の『地唄』、安岡伸好の『あお鳩の声』、戸田順三の『傀儡』の四篇であり、まったく顧みられなかった高橋和巳の応募作は、十年後に改稿して「世界」昭和三十九年十二月号に発表した『貧者の舞い』の原型であったと推定される。闇から闇へほうむり去られた応募作自体の題名が何とつけられ

てあったかは、不明である。

書店の閉店の時間が迫っていたのだろうか。店の主人が出ていけがしにいらだたしく立てるハタキの音にせきたてられながら、高橋和巳は受賞作『太陽の季節』のあちこちを、複雑な気持で立ち読みした。当時の彼は、はなはだしい貧乏であった。一冊百二十円の新刊文藝雑誌すら気軽に買い求めるには、いくばくかの逡巡があったのである。しかし、拾い読みだけで読み捨てにするには、その題名の通り底抜けに明るく、そして高橋が文学とはかくあるべきものと胸中に抱いていた暗鬱な観念の世界とは全く対蹠的な石原作品は、あまりにも気がかりであった。思い切って、彼はその雑誌を買い求め、近鉄大阪線に乗って帰途についた。布施市長瀬の住宅協会団地の1Kの部屋で、改めて『太陽の季節』を熟読し終ったとき、高橋の受けた衝撃は大きく、そして根が深かった。

そのときの感慨を、高橋和巳は後年『投稿について』という短い文章に託して書いているが、彼自身の表現を借りれば、それは、「……たとえて言えば、埴谷雄高の『死霊』の主人公三輪与志のような陰鬱な青年がわけのわからぬことを考えながら散策している道を、颯爽たる新時代の青年が轟音をたてる単車で駆けすぎるのを呆然と見送る、といった情景にちかい。この人の登場と、それを支持する世代や階層の隆起は、必然的に他の部分の陥没をもたらすだろうことを、私は直感した」のであった。高橋和巳エッセイ集に収録されたこの短文は昭和四十年「文學界」五月号に書かれたものだが、おそらくはその前年のくれ「世界」に発表するため、十年前の投稿作品のコピイをもとに『貧者の舞い』を書き進めながら、思わずよみがえったその頃の「無念やるかたなかった」想いが書かせたにちがいない。

オートバイで駆けぬけてゆく新時代の青年・石原慎太郎の背中を見送りながら、高橋和巳は、激

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しいあせりと不安と、そしてさらには言いようのない恐怖を感じた。石原的文学の登場によって、自分の文学、自分達の世代の文学は、もはや出る幕が永久になくなったのではあるまいか。ほんの少し出遅れたために、決定的に埋没してしまうのではあるまいか、という恐怖感だった。

京大の学部在学中に書き起し、その第一部七百余枚を二年前にすでに書きあげていた『捨子物語』のうず高い草稿の束は、発表する場所も出版するめあてもないまま、狭いアパートの押入れの中で、むなしくほこりをかぶって黄ばんでいた。この限りなく憂鬱で晦渋な物語は、もはや陽の目をみることがないのか。文壇ジャーナリズムが待望し、そして世間の読者が望んでいるのは、文字通り〝太陽の季節〟であって、この黄ばんだ安物の原稿用紙の部厚い束の中に封じこめられているような〝暗黒と悲哀〟の長々しい物語ではないのかも知れない。

（……しょせん、闇は太陽光線によって駆逐される運命にあるのか）

高橋和巳は『太陽の季節』のおそろしく行替えの多い、飛び跳ねるような疾走感にみちた簡潔な文体と、鋭くきらめく感覚に故知れぬ脅威を感じた。そして、この僅か百枚にも満たぬ短篇が、持ち去っていった栄光を、激しく嫉妬した。

このとき、昭和六年生れの高橋和巳は、二十四歳だった。同じく七年生れの石原慎太郎は二十三歳である。年齢の上ではわずか一つしか違わなかったが、昭和一桁生れのわたし達にとって、この一年のちがいが、決定的な世代の断層だった。実際には一歳しか違わない石原慎太郎の発想の根は、わたし達のそれとまったく異質だったのである。

なお、前記の文章に続けて、高橋は「……みずからの鉱脈をさぐり当てえた後は、文学の本質にはかかわらぬ一方的な対抗意識も消えていったが、それまではやはり妙に気にかかって、石原慎太

郎が多作するようになる以前は相当精密に読み、友人たちに向って石原慎太郎の諸作に愛憎共存的批判を加えたものである。多く左派系の思弁を思考の基礎としていた身辺の友人たちには、私の石原文学への関心が解せなかったようである」と書いているが、これは明らかに高橋の独り合点である。ここにいう「友人たち」とは時期的にみて、翌三十一年に旗あげしたわたし達「対話の会」の同人をさしているのだが、小松左京も、豊田善次も、石倉明も、表面上はともかく、内心ではみんな高橋和巳とほぼ同質の衝撃を石原文学の登場に感じていた。すくなくとも、わたしにはそうだった。それが証拠に、いま古いスクラップブックを調べてみると、「対話の会」結成の前後に、勤務先の社内報の文藝欄に『スポーツと文学』と題して、長文の石原慎太郎論を書いている。読み返してみると、終始一貫して真向みじんの石原文学否定論であるが、その攻撃的な文章の裏側には、その頃のわたしの石原慎太郎に対するただならぬ関心が透けてみえる。

いわばそれは、わたしたち昭和五年から六年生れの世代に共通の文学的危機感だった。わたし達のすぐ上の世代は、文学的にはいわゆる第三の新人であるが、その頃すでにいっせいに登場し終っていた。その状況をたとえば芥川賞年譜でみると、昭和二十八年上期の安岡章太郎をトップバッターに、二十九年上期には吉行淳之介、二十九年下期には庄野潤三・小島信夫の二人が続き、そしてアンカーの遠藤周作の芥川賞受賞は、昭和三十年上期である。

次は、わたし達の出番である筈だった。しかし、そうはいかなかった。わたし達昭和一桁前半組が文学的方法とモチーフを摑みかねてもたもたしているあいだに、高橋のいわゆるオートバイに乗った新青年たちが、さっそうと駆けぬけて行ったのだ。そのはしりが石原慎太郎であった。続いて昭和八年組の江藤淳が評論の分野で登場し、すぐあとに昭和十年生れの大江健三郎が続く。第三の

新人と「太陽の季節」。この二つの世代のあいだにできた深いクレバスの底に落ちこんで、動きがつかなくなったのがわたし達の世代であった。そのまま埋没してしまうのではないか、という不安と焦燥がわたし達の背中をやいた。

『太陽の季節』という象徴的な作品の登場によって衝撃を受けたのは、高橋和巳だけではなかった。そしてのちに同人雑誌「対話」や「VIKING」に結集する京大新制第一期の文学青年たちだけでもなかった。それは、同じ世代に属する開高健にも言えるし、立原正秋についても言える。いまはもう死んでしまった山川方夫や小林勝も同様だったとわたしは思う。ただ、その作品の質からみて、石原文学とはそれこそ光と闇ほど対蹠的だった高橋和巳がこうむったショックが、やはり最も大きかったとだけは言えよう。

ともあれ、文學界新人賞への投稿とそのみじめな失敗は、一見なんでもない事件のようにみえるが、高橋和巳の文学にとっては、決定的な岐路になった。そのひとつは〝太陽の季節〟派の登場によって「陥没」の危機にさらされた〝憂鬱なる党派〟の文学を擁護するために、同人雑誌による文学運動の必要を痛感したこと。そして、もうひとつは、投稿作が第一次銓衡にさえ残らなかったという事実によって、はっきりと短篇小説と訣別したことである。高橋和巳はおのれの特徴は「鋭くきらめく感覚にではなく、執拗に考え続ける鈍重さにある」ことを確認した。長篇小説こそが自分の本領であって、大長篇のかたちでしか彼の抱いている「志」を表現できないのだ、ということをこのとき高橋は自覚する。

「岐路こそまさに愛すべし」とは、生前の高橋の愛用句であった。そして生涯、岐路にさしかかるたびに、苦難の方へ、苦難の方へと道をとったように、このときも、徹底的な長篇主義という苦難

の道を自ら選んだ。短篇中心の日本の文壇事情のなかで無名の新人が、長篇小説一本やりで世に出ることがいかに困難であるかは、もとより承知の上である。

2

高橋和巳が布施の二間切りの安アパートで「古典の研究や翻訳だけではどうしても癒されぬ衝迫があって、いつ果てるともない長々しい文章をひそかに書き綴っていた」ちょうどそのころ、わたしは、平凡なサラリーマンとして、原稿用紙とは殆んど縁のない生活をしていた。京都の大学で、高橋和巳たちとやっていた「京大作家集団」というガリ版の同人雑誌に『天邪鬼』と題する習作を一つ書いたのを最後に、感ずるところあって、しばらくのあいだ筆を――すくなくとも小説の筆をわたしはたっていた。

理由はいろいろあったように思うが、「京大作家集団」が、あの昭和二十五年から二十七年の嵐のような政治的動乱を背景に、政治と文学の相克のうちに潰滅してからは、意識的に文学の世界から遠ざかろうとしていた。とにかく、文学青年的な精神風土からストイックに身を避けようとする衝動みたいなものがあって、それに頑強に固執していた。

しかし、「京大作家集団」が潰滅四散してからの大学の後半から勤め人生活の四年間の沈黙ののちに、その頃のわたしには、徐々に、しかし確実に文学への指向が復活しつつあった。書きたい衝動がのどもとまでせりあがり、書かねばならぬことが山ほどあるような気がしはじめていたのである。

ほんのときたま、断片的につけていた当時の日記のはしばしにも、いま拾い読みしてみると、そのような気配がにじみ出ている。

たとえば、三十年六月九日の日付で、

「……鷲見勝三と邂逅。十万円三十年満期の保険をかける件で日生の磯和と梅田で逢って阪急裏のホワイトローズでコオヒイを飲み、雨の止むのを待つために〈来々〉でシューマイを食い、帰ろうとしたら、ばったり逢った。丸三年ぶりだったか。京大同学会で鳴らした往年の政治青年・鷲見。いまは共成鋼材という小さな鉄鋼会社にいるという。

いろんな友人の消息をきく。

高橋和巳は昨年末に結婚して、布施でアパート住い。相変らず『売る気のない』小説を書き続けていると云う。豊田善次がその向いの部屋で新婚夫婦に悩まされている。共に教師。三浦浩は都落ちを思い止って映画記者。角田宗彦は近く産経入りをする。三上和夫は自動車会社に入った。大石敞の消息は杳として不明。詩人の前川は胸の病気で寝たっきり。etc. etc」

とあり、なつかしげな筆致で旧「作家集団」周辺の友人たちの近況を書きとめている。それまでのわたしは、意識して旧友達との接触を避けていたふしがあり、したがって、卒業後の消息はまるで知らなかった。なお、六月といえば、高橋和巳が「文學界」七月号の『太陽の季節』を読んでショックを受けていた頃であるが、飛び飛びのわたしの日記には、何もふれていない。私の日記に石原慎太郎がでてくるのは、三十一年になってからである。

「一月五日。……今年は〝煮つまった〟生活をしたいと思う。外のことはどうあれ、やはり書くことが第一だ。何にしろ先ず『作品』がなければならないのだから。もう廿六歳にもなるのだから」

「一月十七日。……吉葉山、負ける。夜、また何も書けぬ。要するに書き出さねばならぬ」

「一月十八日。……夕方『清風軒』でテレビ。吉葉山、危い所で若の花を倒す。物言いつくべきと

ころ悲運の横綱に同情して見逃した感じの一番、負けた若の花の口惜しそうな表情が印象的。夜、直哉の『満州日記』など見る。書けず」

「一月二十日。……帰途、車中で偶然、角田に会う。三浦浩、アメリカに留学するとのこと。『文藝』二月号を読む。何も書かぬ」

「一月二十四日。……第三十四回芥川賞『太陽の季節』の石原慎太郎に決ったそうだ。ジャーナリズムの大騒ぎ。ぼくには興味ある作品だとは思うが、風格のある小説とは思えない。ぼくの理解するかぎりの『小説』であるためには何か重大なものが一本欠けている。直木賞は新田次郎と邱永漢」

「一月二十五日。……とつぜん天野政治から来信あり。彼の言葉を借りれば『かれこれ十年ぶり』である。なつかしい。天野や南や前田等の大高時代の友人に、京大での仲間などで、ひとつ同人雑誌でも作ったら、と思う」

「一月二十七日。……ひる、古川プリントの主人と話し、それとなく同人雑誌の印刷について相談をもちかけてみた。謄写版なら二万円以内で出来る由」

こうして、古い日記の断片を拾い出し、書き移してみると、やっぱり石原慎太郎の出現が、よかれあしかれ大きな刺戟になっていることは覆いがたく、そして、その刺戟がわたしたち戦中派の文学活動の再開、具体的には同人雑誌結成の動きの起爆剤になったことは明らかである。もっとも、「京大作家集団」の解散後、すでに数年、休火山がやがてまた火を噴くように、ながくおさえられていた文学的衝動圧が噴出すべき時期がきてもいたのだ。

昭和三十一年の二月から三月にかけて、わたしはひそかに同人雑誌の計画を進めようとして動いている。旧友達の消息をもとめて、あちこちに手紙をだし、積極的に接触しようとしている。小松

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com